

異文化間教育学の研究主題と研究の観点

小 島 勝

はじめに

異文化間教育学は、「異質な複数の文化の共生」を基本モデルとして、教育事象や理念を分析・考究していこうとする学問であるが、これまで「海外・帰国子女教育研究班 I 1985（昭和60）年以前の研究成果をもとに」（吉谷武志〔研究代表者〕『異文化間教育の体系化に関する基礎的研究 最終報告書』平成8～11年度科研報告書，1999年），「異文化間教育学の構想」（龍谷大学教育学会紀要編集委員会編『龍谷大学教育学会紀要』創刊号，2002年），「異文化間教育学の研究枠組みとキーワード—体系化への試論」（『龍谷大学論集』第464号，龍谷学会，2004年）などによって，私自身の異文化間教育学に対する見解を明らかにしてきた。また，このたび，「異文化間教育に関する横断的研究—共通のパラダイムを求めて」の拙論を『異文化間教育』第23号（異文化間教育学会，2006年5月）で執筆したので，あわせて参照していただければ幸いである。

私は，「異文化間教育」を「異なる文化の間で成長・発達する人間の形成・育成過程に関心をもち，自文化をも異文化（他文化）をも相対化して，『第3の見地』に立てる人間の形成・育成に関わる教育事象・理念」と定義し，こうした教育事象・理念についての学問を「異文化間教育学」と考えているが，そのキーワードを分析することにより，（1）「適応」ではなく「異文化適応」をキーワードとするなどの「付加の方向性」，（2）「適応の型」や「適応段階」を類別化するなどの「精緻化の方向性」，（3）「学校ストレス」など既成の用語を使用している「異文化間」的含意のある「豊穡化の方向性」，（4）「マクロ」と「ミクロ」の間の「ミドクロ」などの「新用語の方向性」の4つの方向性を見いだした。また，異文化間教育の見取り図として，「異文化間教育学の核心は，『異質な文化の共生』ということである。この共生を可能にす

るのは、『対等の（権力）関係』であり、このことから『双方向性』の関係が成り立つ。この関係において、自文化と他文化の『相対化』と『相互変容』・『創造』が起こり、『第3の見地』を拓く。そして、実践の『協働』により、異文化間の教育の実⁽¹⁾が上がる』との見解を示した。

そして、私が研究代表者になって共同研究「異文化間教育に関する横断的研究—共通のパラダイムを求めて」〔平成16～18年度科学研究費補助金 基盤研究（B）〕に現在取り組んでいるが、この過程で先述の『異文化間教育』に中間報告をする機会が与えられたのである。本科研の目的は、「『異文化間教育学』の体系化を目ざして、海外・帰国子女教育、留学生教育、外国人子女教育、外国語教育、日本語教育、多文化教育などについて、これまで行われてきた各々の研究、すなわち各々の『縦断的』研究を『横断』する、共通の研究枠組み、理論モデル、キーワードなどのパラダイムを見いだすとともに、そのパラダイムに該当する実例を具体的に示すこと」であるが、（1）「全体班」、（2）「留学生班」、（3）「言語とコミュニケーション班」、（4）「発達とアイデンティティ班」、（5）「文化班」に分けて遂行していただいている。14名の研究分担者と9名の研究協力者のご協力を⁽²⁾いただいで研究を進めさせていただいている。

科研の研究課題と同タイトルで執筆した前出の『異文化間教育』でのまとめは、以下の通りである。

（1）異文化間教育学の研究領域は、海外・帰国子女教育、外国人子女教育、留学生教育、中国帰国者教育、多文化教育をはじめとして、全ての教育事象・理念の領域にまでおよぶ。

（2）研究主題は、①適応、②アイデンティティ、③言語、④リテラシー、⑤コミュニケーション、⑥発達・成長、⑦カウンセリング、⑧文化、⑨能力・資質、⑩人間観、についてなどである。

（3）教育学の性格を引き継いで、「である」の実証科学であるとともに「であるべき」の実践科学でもある。

（4）方法としては、心理学や社会学などの従来の学問分野の方法を用いる広義の異文化間教育学と固有の方法を用いる狭義の異文化間教育学がある。例えば、既存の教育心理学や教育社会学の方法を用いつつ、研究対象は「異文化間教育事象・理念」である場合は、「異文化間教育心理学」や「異文化間教育社会学」となるなどである。

（5）狭義の異文化間教育学の方法は、「異文化間関係学」と通じ、佐藤郡

衛の言う「異文化間的視点」や「関係性の組み換え」などを特徴とするが、①異質（な文化）が共生する「二元性」ないし「多元性」がまず観点となる。そしてこの②異文化の「間」に注目する「（異文化）間性」、そこからもたらされる③「双方向性」が観点になる。これが実践においては、「相互作用」や「協働」という観点を重視することになり、④異なる文化を「相対化」し、「第3の見地」の視界が拓かれるとともに、「普遍性」への超脱が可能になる。そして、⑤「関係性」である。固定的な「関係」とは異なって、「関係性」には「関係性の組み換え」に象徴されるように流動的な含意がある。海外の日本人学校では、現地事情の授業に関しては、日本人学校教員が「児童生徒」に、日本人学校児童生徒が「教師」になりうる。そうした背景には、権力的に対等であるという、「対等性」ないし「平等な権力性」の理念がある。教育場面において、「教」の側面から見ればこの関係性は部分的であるかもしれないが、「育」や「学び」の側から見れば全体的に論じられる。そして、⑥として、「相互変容」と「構築性」、「創造性」があげられる。これについては、佐藤郡衛が、異文化間教育の定義や「異文化間的視点」において強調しているが、マイノリティ（少数派）とマジョリティ（多数派）との相互作用によって、マイノリティとともにマジョリティも変容し、相互変容を契機にして新たな文化が創造される過程である。この「文化」自体も構築的であるという、カルチュラル・スタディーズの成果もある。

私が以上のような見解をもつに至ったのも、本科研の研究のおかげである。研究分担者・研究協力者の皆様に感謝している。

1. 研究の観点について

ここで①～⑥について、少し説明を加えておきたい。

まず①「異質の共生」であるが、「異文化間教育学」の最も基礎にある見方は、教育事象・理念は本来、理想と現実、伝統と革新、不易と流行、個人と集団、個人性と社会性、国家と国際、大人と子ども、男性と女性、自由と統制、健康と病理、賞と罰、体系的知識と問題解決能力、絶対評価と相対評価、業績本位と所属本位、多数派と少数派など、多くの「異質」の考えや価値観、目標、方法などによって構成されているということであると私は考えている。時と状況に応じて、これらの絶えざる調整を行ってきたのが教育の歴史であったとも言える。

海外・帰国子女教育、留学生教育、外国人子女教育、外国語教育、日本語教

育、多文化教育などの「異文化間教育」事象・理念は、1970年代からの日本社会の国際化に応じて見いだされた教育事象・理念と見なされてはいるが、教育事象・理念そのものが「異文化間的」であるというのが私の考えである。異質の、場合によっては相反する理念や目的・方法を絶えず調整しようとしているのが教育という営みであり、時代によって一方が過度に強調されたり、無視されたりはしたが、その底流においては絶えざる「異質の共生」を目ざしての葛藤・対立・論争の歴史があったと考えている。このことは、これらの異質なものの相互の比重は変化しても、一方が全く不要ということにはならない事情が人間社会にはあることを意味している。この視点に立てば、今日の異文化間教育問題は日本文化と外国文化との調整を主たる課題にしているが、それは教育問題の一部が特出された現象なのである。

これまでは一元的・直線的志向が強く、「あれかこれか」の二者択一を迫ったり、ことの優劣を競ったりということが多かったが、人・物・金・情報が地球規模で行き交う今日の世界においては、二元的ないし多元的、曲線的・螺旋的志向が必要になり、このことを通して、教育事象・理念についての見方も変化してきていると言えるのではないか。

次は②「(異文化) 間性」ということである。「異質の共生」を基礎としている教育営為は、恒常的に「あれか、これか」の「間」で成立しているのではないか。異質なもののそれ自体が、人間生活にとって意味あるものである以上、どちらかに傾斜し、どちらかの近距離にあるとはいえ、関係者は「間」に立っている。たとえどちらか一方に全面的に依拠している時でさえ、もう一方の異質なものが念頭におかれているか、隠れて背後に伏在している。具体的場面である教室での授業にしても、教えようとする教師と学ぼうとする生徒の間で授業は成立している。学ぶ生徒なくしては教えることはできず、教える教師なくして授業は成立しない。教科書に凝縮し結晶している、当該国家ないし大人社会が正統化した知識と技術の体系は、教師を介して生徒との間で伝達される。態度やマナーも、同様である。しかしそのことは、国家・大人社会と教師の間、教師同士の間、教師と生徒との間、生徒同士の間での絶えざる反問と葛藤・議論が渦巻いていることをも意味している。

そこで求められるのが、③「双方向性」ということである。教師は終始生徒の側に立ち、生徒の目線でカリキュラムを見ないと「伝達」がうまくいかない。社会が多様化し、変化の激しい流動性を帯びれば帯びるほど、この視角が重要になる。このことは、関係するすべての当事者間にも求められるのであ

る。国民教育を基本にしてきたこれまでの学校教育も、外国人児童生徒が参入してくることによって外国人児童生徒の側からの視角が求められ、ひいては女性の側からの視角、低所得者層の側からの視角、非行少年の側からの視角、戦争によって侵略された側からの視角など、「双方向的」・「多方向的」な視角がますます求められるようになっていくと考える。

そしてこのことは「視角」とどまることなく、態度や行動、実践の次元においても「相互性」・「相互作用」を重視することにつながる。例えば、授業は教師と生徒との「相互性」・「相互作用」によって成り立っているし、そのような授業が望ましいという授業観を流布させる。一方的な体系的知識・技術の伝達よりも、教師と生徒がともに参加して相互に学びあう「参加型学習」や体験学習重視の授業観に異文化間教育はより賛意を示すのである。

そうした中から、④双方の文化を「相対化」し、どちらの文化にも一方的・全面的に依拠しない「第3の見地」が獲得される。そして、そのことを通して「普遍」の境地にまで至るのである。

次が⑤「関係性」である。この用語は異文化間教育についての論述においてよく用いられているが、その含意についての統一的な見解はまだないようである。

佐藤郡衛は「関係性の組み換え」について、日本の小学校6年生の学級に入ってきたインドシナ難民の子どもの状況を例にしながら説明している。このインドシナ難民の子どもは日本語習得に大変に苦勞をした作文を読んだが、それを聞いた日本の子どもは、その苦勞に共感し、インドシナ難民のこどもが日本の国語の教科書を読めた時、クラスのみんなで喜んだという日本のこどもの作文の事例をとりあげて、「この女の子は、『日本人』と『外国人』という枠組みからではなく、外国籍の子どもとの直接的なかかわりを通し、新しい関係性を構築しようとしているのである。難民の子どもの苦しみ⁽³⁾を初めて知り、それを知ろうとしなかったことを反省し、共感的理解を示している」と。

「日本人」と「外国人」という関係が、「クラスの仲間」「ひとりの子ども同士の関係」などという関係に変わったことを「関係性の組み換え」と表現しているようである。

この「関係性」ないし「関係性の組み換え」という観点は、「対等性」という視角によって支えられる。「教師」も「生徒」も「学び」において、「研究者」も「研究の対象者」も「研究成果の創造過程」において「対等」であり、「対等」であるべきという信念がここに宿されている。そして、その背後にあ

	1. 適応	2. アイデンティティ	3. 言語	4. コミュニケーション	5. 発達・成長	6. カウンセリング	7. 文化観	8. 資質・能力	9. 教育・学習	10. 社会体系	11. 研究方法	12. 人間観
a. 二(多)元性 異質の共生												
b. (異文化)間性 双方向性 相互性												
c. 相対性 第3の見地 普遍性												
d. 関係性 対等性 権力性												
e. 相互変容性 構築性 創造性												
f. 問題性												

るのが、カルチュラル・スタディーズがつとに主張する「権力性」である。

⑥「相互変容性」は、佐藤郡衛が繰り返し提唱していることであるが、多数派も少数派とともに変容するところに、「異文化間教育」の成果がある。また、「文化観」として、「文化の可変性」が強調され、構築主義の影響を受けて、文化の「構築性」や「創造性」が指摘されるのである。

そして、「問題性」として別枠で設け、研究主題として挙げた主題に対応して、「異文化間教育学」で「問題性」とされてきた主題をここに入れてみることにした。

2. これまでの研究に見る理論モデルとキーワードの分類

こうして、研究主題と研究の観点を交差させた表が、前頁の「表 研究主題と研究の観点的マトリクス」である。なお、この研究主題については、『異文化間教育』に発表したものを修正しているが、これまで調べた関連文献（後掲の〈参照文献〉）の中で取り上げられた「理論モデル」と「キーワード」を各セルに当てはめて分類を試みたのが、以下の○理論モデルと○キーワードの分類である。

〈参照文献〉に関しては、これまで調べた文献に限られているので、これからさらに拡充していきたい。また、紙幅の関係で、〈参照文献〉には日本語文献のみを挙げ、この中で紹介されていた英語文献については割愛した。「理論モデル」と「キーワード」の“出所”という点では問題があるが、拙論では、日本の異文化間教育研究において“取り上げられた”というところにより意義を見いだす意味で、このようにした。また、理論モデルとキーワードの各々の説明については、必要最小限度付記したが、不十分なことは承知している。これについては、別稿で詳しく論じたいと考えている。取り上げられた文献については、ページ数が特定されていない文献も含まれているが、この「分類」自体も暫定的なものなので、今後さらに検討していきたい。研究の枠組みの検討も、次稿を期したい。

○理論モデル

1, 2, 8, a, d, e ①異文化適応の位相：文化的調整、エスニック・アイデンティティ、文化的能力、役割変容；江淵一公(1994, p.86)

1, 8 a ①異文化体験の4類型：i) 異文化葛藤型, ii) 異文化不適応型, iii) 異文化適応型, iv) 異文化同化型；佐藤郡衛 (1992, pp.14-15)

②適応戦術 (adaptive strategies)：再肯定（土着文化志向）(reaffirmation)―総合

- (synthesis) —撤退・回避 (withdrawal) —バイカルチュラリズム (biculturalism) —建設的境界化 —(constructive marginality) —補償的適応 (compensatory adaptation) —解釈 (interpretation); 江淵一公 (1994, p. 96)
- 1 a ①異文化適応の類型：統合 (integration) ・同化 (assimilation) ・離脱 (separation) ・境界化〔周辺化〕 (marginalization); 井上孝代 (2001, p. 14); 佐藤郡衛 (2003, pp. 50-51)
- ②異文化適応の3類型：i) 非文化変容型 (inacculturated), ii) 境界型 (marginal), iii) 文化変容型 (acculturated); 江淵一公 (1994, p. 90)
- ③異文化適応の4類型：i) 文化変容型 (acculturation), ii) 統合型 (integration), iii) 拒絶型 (rejection), iv) 文化棄却型 (deculturation); 江淵一公 (1994, pp. 87-88)
- ④異文化適応の5類型：i) 土着文化に頑固に執着し、西洋文化は一切拒絶するタイプ, ii) 土着文化も西洋文化も共に拒絶し、全く新しい信仰・価値体系を創り出したタイプ, iii) 土着文化を拒否して西洋文化の価値体系に同化したタイプ, iv) 2つの文化体系の挟間にあって、いずれにも帰属を決めかねている“揺れている”タイプ, v) 多文化的環境とそれが通常もたらす文化的葛藤に対して、創造的にかつ効果的に適応しているタイプ：バイカルチュラリズムという特殊な適応形式によって所与の状況を乗り越えていると見られる行動類型; 江淵一公 (1994, p. 91)
- ⑤異文化適応の類型概念図：エスニシティと文化変容（文化的同化）の視点からみた：マッフィー (Mcfee, Malcolm) のモデルをベースに、より一般化した形のモデルを構成; 江淵一公 (1994, pp. 112-113)
- ⑥異文化適応過程：honeymoon, culture shock, adjustment, mastery; 塘利枝子 (p. 40)
- ⑦異文化適応段階：i) 接触 (contact), ii) 崩壊 (disintegration), iii) 再統合 (reintegration), iv) 自律 (autonomy), v) 独立 (independence); 塘利枝子 (p. 41)
- ⑧異文化接触過程：i) 孵化期 (魅了期), ii) 移行期 (敵意期), iii) 学習期 (適応期), iv) 受容期 (二文化並立期), v) 復帰ショック・再適応期; 塘利枝子 (p. 40)
- ⑨文化接触後の変化の類型：集団レベル＝集団虐殺 (genocide), 同化 (assimilation), 隔離 (segregation), 統合 (integration), 個人レベル＝消滅型 (passing), 排外主義型 (chauvinistic), 周辺型 (marginal), 仲介型 (mediating); 井上孝代 (2001, pp. 15-16)
- ⑩適応の周期：接触 (contact) —競争 (competition) —葛藤 (conflict) —調整 (adjustment) —同化 (assimilation); 江淵一公 (1994, p. 74)
- ⑪Uカーブ仮説：「初期の困難に直面する」段階 (initial confrontation phase) ・「適応の危機」段階 (adjustment crisis phase) ・「回復する」段階 (recovery phase); 大橋敏子 (p. 64); 横田雅弘・白土悟 (pp. 88-89, pp. 239-240)
- ⑫Wカーブ仮説：Uカーブ仮説に帰国後のUカーブを付加; 大橋敏子 (p. 64); 横田雅弘・白土悟 (p. 89)
- ⑬カルチャーショックの位相：5つの位相 (phase): i) 異文化との「接触」によ

り、自文化にない諸特徴に好奇心をそそられ、興奮や感激を覚える段階（接触の位相）、ii）物珍しさも消え失せ、逆に、違和感、戸惑い、混乱、無気力などにさいなまれる段階（崩壊の位相）、iii）主体性を取り戻そうとする努力がなされる段階（再統合の位相）、iv）自文化と異文化と差異とともに共通点に気づき、両者の間の異同を正当と認め落ち着きを取り戻す段階（自律の位相）、v）文化の差異や共通点の評価や新たな意味づけもできるようになり、より豊かな自己実現に向かうことが可能となる段階（独立の位相）；江淵一公（1994, p. 94）

⑭仮住いと本住い：親は仮住い、子は本住い；箕浦康子（1980）；裴岩ナオミ（1987, p. 79）

⑮対人関係の領域での異文化への同化過程：認知面・行動面・情動面：（i）自文化と異文化での対人関係の差を認知していない段階、（ii）異文化を認知しているが、行動面には現われず、しばしば感情的に反発を示す段階、（iii）認知面、行動面では同化しているが、感情面では自文化の段階、（iv）認知面、行動面、情動面のすべての面で同化している段階；箕浦康子（1984, pp. 59-62）；中西晃（1988, p. 17）

⑯多文化主義時代の統合モデル（bicultural/multicultural, synthesis model）：↔同化主義時代の葛藤・欠如態モデル（conflict/deficit model）；関口知子（p. 12）

2 a, e ①文化変容とアイデンティティの3類型：i）調和的な文化変容（consonant acculturation）：モノカルチュラル・アイデンティティ、ii）選択的な文化変容（selective acculturation）：バイカルチュラル・アイデンティティ、iii）不協和な文化変容（dissonant acculturation）：周辺化されたアイデンティティ；関口知子（p. 14）

2 a ①帰国子女のアイデンティティの型：i）削り取り型、ii）付け足し型、iii）自律型；裴岩ナオミ（1987, pp. 67-80）；佐藤郡衛（2003, p. 160）

②社会的アイデンティティの枠組み：第1象限＝同化－統合、第2象限＝異化－統合、第3象限＝異化－排除、第4象限＝同化－排除；石川准（1999, p. 203）；佐藤郡衛（2003, pp. 154-155）

③在日韓国・朝鮮人の民族的アイデンティティ：i）共生志向、ii）帰化志向、iii）祖国志向、iv）個人志向；福岡安則（pp. 76-107）；佐藤郡衛（2003, p. 157）

④アイデンティティの形成過程：i）ホスト集団の文化への同調（conformity）、ii）不協和（dissonance）－支配集団の文化と自集団の価値や信仰との差異・矛盾を経験して混乱に陥る心理的動揺と苦悩の段階、iii）抵抗と没入（resistance and immersion）－自尊心を保持するために、自文化のルーツやすぐれた点を探究する努力を続ける段階、iv）内省（introspection）－自集団に対する責任感および忠誠心と自律的な個人としての主体性との間のバランスをどう保つかを考えるようになる段階、v）協同的關係への認識の深化と統合（synergetic articulation and awareness）－自律的な個人としての尊厳、主体的な人間としての意識が確立され、より柔軟な態度で事態に対処するようになる段階；江淵一公（1994, p. 95）

3, 9 a ①バイリンガル教育モデル：i）「解決すべき問題としての言語」（language-as-problem）観に基づいた「移行型」（transitional）、ii）「権利としての言語」（language-as-right）観にもとづいた「母語維持型」（maintenance）、iii）「資源

- としての言語」(language-as-resource) 観にもとづいた「文化資源豊富型」；関口知子 (p. 45)
- 3 a ①バイリンガリズムの類型：i) 平衡バイリンガリズム, ii) 二重バイリンガリズム, iii) 偏重バイリンガリズム, iv) セミリンガリズム (「半言語」)・ダブルリミテッド；山本雅代 (pp.15-23)；佐藤郡衛 (2003, pp.184-185)
- 5 a ①異文化センシティビティーモデル (developmental model of intercultural sensitivity)：異文化に対する個人の意識の発達段階：6つのステージ：i) denial—違いそのものを否定している段階, ii) defense—違いを防衛しようとする段階, iii) minimization—違いを最小化していく段階, iv) acceptance—違いを受容する段階, v) adaptation—違いへ適応をしていく段階, vi) integration—違いとの統合の段階；徳井厚子 (2002, p. 39)
- ②バイカルチュラル・パーソナリティ (bicultural personarity) 発達段階論；(i) 心理的段階, (ii) 均衡崩壊の段階, (iii) 文化変容・同化の段階の3次元における「対立する諸要求の調整過程」として、バイカルチュラル・パーソナリティの発達過程を捉える枠組み；江淵一公 (1994, pp.116-117)
- 7 a ①多文化主義政策の6類型：多様性の許容度による類型：i) シンボリック多文化主義, ii) リベラル多文化主義・文化多元主義, iii) コーポレート多文化主義, iv) 連邦制多文化主義・地域分権多文化主義, v) 分断的多文化主義, vi) 分離・独立主義多文化主義；関根政美 (pp.50-59)
- ②多次元マトリックス・モデル (multi-dimensional matrix model)；江淵一公 (1994, p.66)
- 8, 9, 10 a ①国際教育協力の4類型：第1象限＝依存－文明 (上からの近代化), 第2象限＝依存－文化 (植民地政策), 第3象限＝自立－文明 (教育制度・システムの現地化), 第4象限＝自立－文化 (エンパワーメント型：途上国自らの意思決定)；佐藤郡衛 (2003, pp.145-147)
- 8 a ①多文化戦略の3類型：i) リソース活用型戦略, ii) ハンディ克服型戦略, iii) エクイティ演出型戦略；額賀美紗子 (pp.79-82)
- ②異文化体験の2段階：第1段階＝感受期「対人関係対処様式をめぐる意味空間がその人の情動に影響を及ぼし始める時期」・「文化が個人の内部に足場を固める時期」, 前半 (9～11歳頃) の「準備期」と後半 (11～14歳頃), 臨界期 第2段階＝成受期につくられた個人の意味空間が、その後のさまざまな文化的インパクトを受けて姿を変える；箕浦康子 (1988, pp.3-4)；佐藤郡衛 (2003, p.59)
- 9, 4, 8 a ①バイリンガル教育のカリキュラムの類型：i) 認知的負担 (小)－低コンテキスト, ii) 認知的負担 (小)－高コンテキスト, iii) 認知的負担 (大)－高コンテキスト, iv) 認知的負担 (小)－低コンテキスト；ベーカー, コリン (岡秀夫訳編) (pp.161-178)；佐藤郡衛 (2003, pp.189-191)
- 9 a ①文化同化・異質な文化への文化学習 (cultural learning) の5段階：i) あることを単に「知った」(learn about) という段階, ii) その意味 (由来や理由など) が「分かった」(understand) という段階, iii) それを (正しいと)「信じる」

- (believe) に至った段階, iv) それがその人の「認知システム」の中に統合され, 「行動」 (behavior) にまで現われるに至った段階, v) それがその人の動機づけの構造の一部として「内面化された」 (internalized) 段階; 中西晃 (1988, p.17)
- 11 a ①臨床社会学の構成要素: サイエンス—知識 (書斎 [理論]), サイエンス—行為 (フィールド [調査]), アート—知識 (対人関係 [人情の機微]), アート—行為 (政策現場 [介入]); 大村英昭 (p.10); 佐藤郡衛 (2003, pp.236-238)
- 1, 5 b ①適応の内的発達モデル i) 同化 (不快・不安), ii) 調節 (疑問・好奇心), iii) 同化調節 (理解・納得); 横田雅弘・白土悟 (pp.91-92)
- 1 b ①異文化間教育の4種: i) 文化転換型 (移行型 transcultural), ii) 文化交差型 (cross-cultural), iii) 文化分離型 (異文化回避型・コロニー型), iv) 相互作用型; 江淵一公 (1994, pp.42-51)
- 3, 9 b 積極的なバイリンガル教育・消極的なバイリンガル教育: i) イマージョン型, ii) 維持型, iii) 双方向型, iv) 主流バイリンガル型; 末藤美津子 (p.20)
- 8, 4 b ①異文化間コミュニケーション能力 (intercultural communication competence) のモデル: 行動, 態度, 認識の3つの側面から総合して考えるモデル; 松田陽子 (p.67)
- 8 b ①異文化間能力測定の試み; カルチュラルアウェアネス・自己調整能力・状況調整能力; 山岸みどり・井下理・渡辺文夫 (pp.201-214)
- ②共感性のタイプ: 共有経験高い・低い×不全経験が高い・低い, i) 両向型, ii) 共有型, iii) 不全型, iv) 両貧型; 角田豊 (pp.193-200); 井上孝代編著, 裴岩奈々・菊池陽子共著 (p.144)
- 8 c ①ディアスポラ (離散) の5類型: i) 被害者ディアスポラ, ii) 労働ディアスポラ, iii) 交易ディアスポラ, iv) 帝国ディアスポラ, v) 文化ディアスポラ; コーエン, ロビン; 森本豊富 (p.5)
- 2 d, c ①第3文化の子どもと主流文化との関係性, 「外見」と「内面化した文化」による境界付け: i) 外国人 (FOREIGNER) 見かけが違う (look different) 考え方も違う (think different), ii) 養子 (ADOPTED) 見かけが違う (look different) 考え方は同じ (think alike), iii) 隠れ移民 (HIDDEN IMMIGRANT) 見かけは同じ (look alike) 考え方が違う (think different), iv) 鏡 (MIRROR) 見かけも同じ (look alike) 考え方も同じ (think alike), 「鏡 (MIRROR)」とは「主流集団の人々と外見も考え方も変わらぬ存在」の意味; 関口知子 (p.210)
- 10, 2 d ①友人ネットワークの機能モデル (a functional model of friendship networks): i) 同国出身者との友人関係には自文化の価値観や文化的アイデンティティを維持し表現する機能, ii) ホストとの友人関係には学業成就機能, iii) 他国からの留学生との友人関係には娯楽機能が顕著; 工藤和宏 (p.96, p.106)
- d ①タテ (非対等) のつながり・ヨコ (対等) のつながり: 畏怖, 尊敬, 思慕・友愛, 相互信頼, 相互支援; 星野命 (2003, p.127)
- ②ポジティブ・マイノリティと弱いネガティブ・マイノリティ; 関口知子 (p.12, p.195, p.241)

- e ①文化変容の3つのパターン：i) 同時的 (simultaneous) 文化変容, ii) 重なり (overlapping) 文化変容, iii) 順次的 (successive) 文化変容；井上孝代 (2001, p.13)
- ②文化変容の類型：i) 調和的な文化変容 (consonant acculturation), ii) 選択的な文化変容 (selective acculturation), iii) 不協和な文化変容 (dissonant acculturation)；関口知子 (pp.319-328)
- ③文化変容の過程：i) 異文化間伝達／伝播 (intercultural transmission/diffusion), ii) 文化創造 (cultural creativity), iii) 文化崩壊 (cultural disintegration), iv) 反動的適応 (reactive adaptation), v) 前進的調整 (progressive adjustment)―融合 (fusion) と同化 (assimilation), vi) 共生的多元主義 (stabilized pluralism)；江淵一公 (1994, pp.71-72)

○キーワード

- a ①二元性 (dual social connections)：「二つの社会への帰属」；江淵一公 (1994, p.76), ②複数性 (マルチプリシティ)；ロウ, リサ (浜邦彦訳)；馬淵仁 (p.58), ③二次元モデル (two-dimensional model), バイカルチュラル・モデル；江淵一公 (1994, p.101), ④バイカルチュラリズム (二文化並存, 二文化主義)；江淵一公 (1994, p.7, p.100, p.221), ⑤意図的バイカルチュラリズム；江淵一公 (1994, p.388), ⑥バイカルチュラリティ (biculturality)：二文化性；江淵一公 (1994, p.221), ⑦バイカルチュレーション (biculturation, 二文化並存化)；江淵一公 (1994, p.61, p.97), ⑧異文化共生性 (interculturality)；江淵一公 (1994, p.535), ⑨文化的二重性；江淵一公 (1994, p.227), ⑩二文化的自律性 (bicultural autonomy)；江淵一公 (1994, pp.96-97), ⑪文化的二元性 (cultural duality)；江淵一公 (1994, p.81), ⑫異文化性；馬越徹 (p.22), ⑬内なる異文化；倉地曉美 (2002, p.51), ⑭異文化度；塘利枝子 (p.32), ⑮文化的不連続 (cultural differences/discontinuities)；江淵一公 (1994, p.355), ⑯1次的文化不連続・2次的文化不連続；江淵一公 (1994, p.355), ⑰二元的文化化 (bicultural enculturation; dual enculturation)；江淵一公 (1994, pp.54-55)↔一元的文化化 (monocultural enculturation)；江淵一公 (1994, p.51) ⑱文化の重ね着；関口知子 (p.54), ⑲文化的同化 (cultural assimilation)；江淵一公 (1994, p.83), ⑳再文化化過程 (reculturation)；江淵一公 (1994, p.53), ㉑文化化の不連続；江淵一公 (1994, p.2), ㉒自文化復帰 (reculturation)；江淵一公 (1994, p.43), ㉓異文化摩擦；江淵一公 (1993, p.12), ㉔異文化剥がし；江淵一公 (1994, p.498), ㉕ハイブリディティ (混合性, 雑種性, 異種混淆性)；佐藤郡衛 (2003, pp.163-164), 馬淵仁 (p.58, p.64), ㉖文化的混合 (cultural blend)；江淵一公 (1994, p.139), ㉗バイミュージカリズム；鈴木正幸・斉田好男・吉良武志 (p.66)
- a, e ①多元的文化変容 (plural acculturation)；江淵一公 (1994, p.97)
- 1 a ①異文化適応 (cross-cultural adaptation)；江淵一公 (1994, p.11), ②異文化適応スキル；田中共子 (p.138), ③二つの文化への同時的な社会化 (concurrent socialization into two different cultures)；江淵一公 (1994, p.98), ④再社会

- 化；江淵一公 (1994, p.496), ⑤二重カルチャーショック：慣れない異国での生活に加え，農家での生活に戸惑う；徳井厚子 (2002, p.40), ⑥復帰ショック；星野命 (2003, pp.146-147)；徳井厚子 (2002, p.40), ⑦帰国（復帰）ショック；大橋敏子 (p.64), ⑧多エスニック化（多文化化）；関口知子 (p.26),
- 2 a ①異文化アイデンティティ (intercultural identity)；工藤和宏 (p.97), ②二重アイデンティティ；江淵一公 (1994, pp.296-297), ③バイカルチュラル・アイデンティティ；関口知子 (p.301)↔モノカルチュラル・アイデンティティ；関口知子 (p.320), ④バイカルチュラリズム；江淵一公 (1994, pp.101-103), ⑤多文化(的)アイデンティティ (multicultural identity)；工藤和宏 (p.97)；箕浦康子 (1995, pp.33-34)；佐藤郡衛 (2003, p.163), ⑥ディアスポラ：多元的でハイブリッドなアイデンティティを持つ人間像；佐藤郡衛 (2003, p.164)；馬淵仁 (p.64, p.66)：帰属すべき故郷をもたない根無し草；野入直美 (p.244), ⑦計画的ディアスポラ：日本人の海外駐在員；森本豊富 (p.5)
- 3 a ①バイリンガリズム（二言語併用）；江淵一公 (1994, p.7), ②二言語併用者 (bilingual person)；江淵一公 (1994, p.101), ③ピジン化：簡潔化；ネウストプナー, J.V.；横田雅弘・白土悟 (pp.215-216)
- 4 a ①コミュニケーション摩擦；岩田祐子 (p.129)
- 6 a ①多文化カウンセリング (multicultural counseling)；井上孝代 (2004, p.40), ②多文化カウンセリング・インベントリー (multicultural counseling inventory [目録])；井上孝代編著，髪岩奈々・菊池陽子共著 (p.59)
- 7 a ①文化的多元主義；江淵一公 (1994, p.203), ②共生的多元主義 (stabilized pluralism)；江淵一公 (1994, p.98)
- 8 a ①異文化能力：自文化と他文化の間の自分にとって心地よい場所，すなわち「第3の場」を創造できるような能力；川上郁雄 (pp.1~19)；中山亜紀子 (p.16), ②共生の能力；馬淵仁 (pp.138-142, pp.184-187, pp.192-196), ③文化的ポテンシャル (cultural potential)：異文化の内容（言語・対人関係のルール・思想・技術）を身につけており，国際的感覚や日本人社会に対する醒めた眼をもっている；星野命 (2003, pp.134), ④多文化共感性：「2つ以上の文化にまたがった関係の上に立つ共感性」；井上孝代編著，髪岩奈々・菊池陽子共著 (p.37), ⑤異文化への気づき (intercultural awareness)；岩田祐子 (pp.135), ⑥文化的認識 (cultural awareness)；江淵一公 (1994, pp.87), ⑦異文化接触 (cross-cultural contact)；江淵一公 (1994, p.11), ⑧異文化体験；佐藤郡衛 (1992, p.13), ⑨異文化受容態度；塘利枝子 (p.34), ⑩異文化的行動；塘利枝子 (p.29), ⑪スイッチング・メカニズム (switching mechanism, 切り替え機構)；江淵一公 (1994, p.106)
- 8, 4 a ①異文化コミュニケーション能力；徳井厚子 (2002, p.171)
- 9 a ①目的文化（目標文化） (target culture)：学習者が同定している文化（自文化）以外の文化で，学習対象となっている文化；倉地暁美 (1990, pp.123-148, 1991, p.79), ①異文化学習；徳井厚子 (2004, p.59), ②異文化学習機能；工藤和宏 (p.102), ③異文化トレーニング (cross-cultural training, intercultural training)；岩田祐子 (p.134), ④多文化教育 (multicultural education)；江淵一公 (1993,

- p. 6), ⑤出会いの教育 (Pädagogik der Begegnung); 天野正治 (p. 51), ⑥異文化交流; 坪井健 (pp. 63-70), ⑦異文化交流教育; 坪井健 (p. 72), ⑧教育摩擦; 中西晃 (1992, p. 5); 佐藤郡衛 (1992, p. 11), ⑨葛藤の教育 (konflikt Pädagogik): むしろ葛藤に方向づけられており, 多文化社会の発展にとって妨げとなるさまざまな障壁の除去を目的にする; 天野正治 (p. 50), ⑩カルチャー・アシミレーター (culture assimilator): 異文化トレーニングの中の帰属トレーニング (attribution training) の手法; 岩田祐子 (p. 134), ⑪異文化マニュアル; 吉野耕作; 関口知子 (p. 21),
- 10 a ①再体制化 (reorganization); 江淵一公 (1994, p. 72), ②構造的同化 (structural assimilation); 江淵一公 (1994, p. 83), ③マクロ・システム (macrosystem 共システム, 全体系): 本人をとりまく国家や社会, 共同体のレベル; 井上孝代編著, 髪岩奈々・菊池陽子共著 (p. 8); 塘利枝子 (pp. 49-50)
- 11 a ①複眼的・散眼的視点: 散眼的一あちこちににらみをきかせた; 星野命 (2003, p. 241)
- 12 a ①異文化的存在: 一世代昔の文化価値をまとった親や教師が理解できないような考え方・行動の仕方・感じ方をする子どもたち; 門脇厚司・宮台真司編; 本田和子; 関口知子 (p. 22) ②異文化共生人間 (intercultural person); 江淵一公 (1994, p. 529), ③異文化インフォーマント: 日本文化を理解するための情報提供者; 中島祥子・板倉ひろこ (p. 90), ④二文化人 (bicultural person)・バイカルチュラル人間 (bicultural person)・二文化併用者; 江淵一公 (1994, p. 7, p. 10, p. 96, p. 299), ⑤二文化主義者 (biculturalist): 統合主義者 (integrationalist); 江淵一公 (1994, p. 249), ⑥二元的人格 (dual personality); 江淵一公 (1994, p. 76), ⑦日系二文化人; 江淵一公 (1994, p. 302), ⑧多文化人 (multicultural person); 江淵一公 (1994, pp. 96-97), ⑨マルティ・カルチュラル・パースン; 星野命 (2003, p. 53, p. 153), ⑩第二次的知識人: 知的作品の解釈や伝達に従事する人びと, 教師・ビジネスエリート; 馬淵仁 (p. 16), ⑪アメラジアン: アメリカ人 (American) とアジア人 (Asian) の両親の間に生まれた人々; 野入直美 (p. 214)
- b ①異文化間: 親から受けつぐ文化と生きている社会の主流文化の間; 関口知子 (p. 40), ②境界空間 (liminal space): 「文化と文化の間, 分離と再統合, 中心と周縁, マジョリティとマイノリティ, 過去と現在と未来といった区分をまたいで流動する空間であり, 同時に, それらの間を繋ぐ境界的・過渡的状态ないし過程として存在する曖昧な時空間»; 関口知子 (p. 23); 今福龍太, ③インターフェース; 村田雅之 (p. 128); 奥住忠久
- 1 b ①相互調節 (accomodation); 江淵一公 (1991, p. 14)
- 2 b ①自己組織性: システムが環境と相互作用するなかで, みずからの構造を変化させ, 新たな秩序を形成する性質; 今田高俊; 佐藤郡衛 (2003, p. 45)
- 2, 8 b ①異文化間コミュニケーション能力; 松田陽子 (p. 67); 西田ひろ子編著 (pp. 41-45),
- 3 b ①異文化間語用論; 伊藤克敏 (p. 24)
- 4 b ①異文化間コミュニケーション; 江淵一公 (1994, p. 7); 上原麻子 (p. 59); 西

田ひろ子編著 (p. iii), ②共感的コミュニケーション; 井上孝代編著, 裴岩奈々・菊池陽子共著 (pp. 31-32), ③シェアリング; 井上孝代編著, 裴岩奈々・菊池陽子共著 (p. 96)

5 b ①発達の相互性; 井上孝代編著, 裴岩奈々・菊池陽子共著 (p. 13); ②異文化間成長; 関口知子 (p. 14, p. 211)

6 b ①異文化間カウンセリング (cross-cultural counseling); 倉地暁美 (1991, p. 73); 白土悟 (2004, p. 4); 神村栄一 (2004, p. 40); 井上孝代 (2004, p. 40), ②マクロ・カウンセリング: 「マクロ」とは, 「構造的」「システムの」「相互関係の」「複雑系」等を含意する; 井上孝代編著, 裴岩奈々・菊池陽子共著 (p. ii, p. 1, p. 7); 井上孝代 (2000, pp. 29-41, 2004, p. 41) ③ミラーリング効果; 井上孝代編著, 裴岩奈々・菊池陽子共著 (p. 55)

6, 12 b ①異文化間カウンセラー; 井上孝代 (2004, p. 45),

7 b ①文化的混交 (cultural hybrid); 江淵一公 (1994, p. 77),

8 b ①異文化間能力 (interkulturelle kompetenzen); 天野正治 (p. 54); 伊藤克敏 (p. 27); 山岸みどり (1995, pp. 209-223); 徳井厚子 (2004, p. 58), ②異文化間リテラシー; 山岸みどり (1997, pp. 37-51); 佐藤郡衛 (2003, p. 174); 新井郁男 (pp. 10-11, p. 14, p. 17); 江淵一公 (2001, p. 121), ③自他的共感: 共感的コミュニケーション, 双方向的共感, 「自分の共感を相手に伝え, さらに共感的な関係を構築していくこと」, 多文化的な視点が必要; 井上孝代編著, 裴岩奈々・菊池陽子共著 (pp. 31-32), ④異なる視点への気づき; 塚本美恵子 (p. 76), ⑤再解釈 (reinterpretation); 江淵一公 (1994, p. 72), ⑥リフレーミング: 「自分を追い詰め, 制限するような否定的な固定観念を, 別の視点から考えることで変えていく方法」, 「患者に自己肯定感と安心感を与え, 新しい力と自信を持たせることができる」; 井上孝代編著, 裴岩奈々・菊池陽子共著 (p. 55), リ・フレイミング: 「自らの『意味』の組み替えができる力」; 裴岩ナオミ (1991, pp. 14-47); 佐藤郡衛 (2003, p. 165, p. 172), ⑦異文化間トランス; 原裕視 (pp. 4-13); 小澤理恵子 (pp. 31-52); 横林宙世, ⑧異文化間経験; 関口知子 (p. 31), ⑨異文化間移動; 塘利枝子 (p. 45, p. 212), ⑩トランスミгранト (transmigrant): 「一時的出稼ぎ」と「定住・永住移民」の中間移住形態; 森幸一; 関口知子 (p. 74)

9 b ①異文化間教育; 天野正治 (p. 50), ②異文化間教育 (二元的文化化); 関口知子 (p. 115), ③異文化間学習; 天野正治 (p. 50), ④相互啓発; 天野正治 (p. 45), ⑤留学生アドバイジング (Foreign Student Advising; 横田雅弘・白土悟 (p. 65); 白土悟 (1999, pp. 36-50), ⑥帰属トレーニング (attribution training): 参加者に, 他の文化に内在する基本的な考え方や態度, 役割期待などを提示し, 文化によって規定された視点に気づかせ, 相手の視点から理由づけができるようにするトレーニング; 水田園子; 岩田祐子 (p. 134), ⑦カルチャーアシミレーター (culture assimilator): ある出来事の原因や行為の意図を, 文化的背景の異なる相手の視点から解釈する事を学ぶ帰属トレーニング (attribution training) の一つの手法, intercultural sensitizer という言い方もされる; 徳井厚子 (2002, p. 132)

9, 10 b ①異文化間サポート・ネットワーク; 安場淳 (p. 115)

- 9, 11b ①異文化間教育研究；天野正治 (p. 50),
- 10b ①メゾ・システム (mesosystem 間システム, 間接系)；マイクロ・システム間の相互の関連を問題にするレベル：Bronfenbrennerの生態学的システムモデル, マイクロシステム (microsystem 直システム, 個別系)・メゾシステム・エクソシステム (exosystem, 外システム外接系) マクロシステム (macrosystem 共システム, 全体系)・クロノシステム (chronosystem)；井上孝代編著, 髪岩奈々・菊池陽子共著 (p. 8)；塘利枝子 (pp. 49-50),
- 11b ①異文化間研究 (方法論)；星野命 (1989, p. 7), ②異文化間教育心理学；星野命 (2003, p. 127)
- 12b ①異文化間人 (intercultural person)；江淵一公 (1994, p. 7), ②異文化間の存在；小島勝 (1999, p. 41, 2002, p. 14), ③150%人間 (150% Man)；二文化的環境で二文化の間の通訳兼仲介者としての役割を果たす能力を備えた人物；江淵一公 (1994, p. 98), ④文化仲介者 (cultural broker, cultural mediator)；江淵一公 (1994, p. 104)；馬淵仁 (p. 16), ⑤文化の媒介者；倉地暁美 (1991, p. 72), ⑥デカセギ；関口知子 (p. 31), ⑦国際児：混血児, ハーフ, ダブル；鈴木一代 (p. 42)
- c ①第3の見地；小島勝 (1999, p. 40, 2002, p. 7, 2004, p. 47)
- 2 c ①超文化的アイデンティティ；箕浦康子 (1995, pp. 33-34)；佐藤郡衛 (2003, p. 163)
- 7 c ①トランスカルチュラル；山田礼子 (pp. 4-16), ②メタ・カルチャー；髪岩ナオミ (1986, pp. 51-56)；江淵一公 (1994, pp. 512-513)
- 10 c ①地球市民教育；箕浦康子 (1997, 1998, p. 7)
- 11 c ①異文化間 (メタ) の視点；関口知子 (p. 39, p. 56)
- 12 c ①第三文化人 (the third culture person)；江淵一公 (1994, p. 7), ②海外成長日本人 (Japanese grown-up overseas)；髪岩ナオミ (1987, p. 67)；星野命 (2003, p. 127), ③第三文化の子どもたち (third culture kids)；関口知子 (p. 12, p. 39), ④越境者；森本豊富 (pp. 4-16), ⑤文化的越境者；関口知子 (p. 40), ⑥トランスナショナル越境者；森本豊富 (p. 11), ⑦メタ・カルチュラル・パースン；星野命 (2003, p. 53), ⑧普遍人 (universal person)；江淵一公 (1994, p. 7)
- d ①関係性の組み替え；佐藤郡衛 (2003, p. 44, pp. 46-47, p. 70), ②相互調整 (mutual accommodation)；佐藤郡衛 (2003, p. 50), ③「今, ここ」の文脈；関口知子 (p. 211), ④統合 (integration)；居住地や職業・教育等における平等な制度的参加 (相互作用) の機会が増えていき, 分離された状態が消滅していくこと；江淵一公 (1994, pp. 83-84), ⑤エクイティ；異なる価値体系間の質的な平等を目指す概念；川崎誠司 (p. 69), ⑥参加型開発；チェンバース, ロバート (p. 100)；佐藤郡衛 (2003, p. 148), ⑦位置取りの政治；ある社会の中に差異が見いだされ, それに意味が与えられて, 差異を持つ者と持たない者との間に二項対立が生じるとき, しばしば権力は不平等に分配される。そして, 境界線のどちらに側に誰を配置するかをめぐって, せめぎ合いが起きる；渋谷真樹 (p. 117), ⑧エンパワーメント；川崎誠司 (p. 75), ⑨エンパワーメント型；これまで「援助する側」となっていた外部の組織や機関は, 援助ではなく, 「ともに働く, 協力する側」として地域住民との平

等で相互作用的なパートナーシップの関係を形成すること；久木田純 (pp.13-16)；佐藤郡衛 (2003, pp.136-139)

- 2 d ①互換的なアイデンティティ (compatible identity)；江淵一公 (1994, p.93), ②周辺化されたアイデンティティ；関口知子 (p.319), ③アイデンティティ管理：印象操作・名誉挽回・開き直り (解放)・差別；石川准 (1992, pp.27-33)；佐藤郡衛 (2003, pp.157-158)
- 6 d ①関係促進 (ファシリテーション)；井上孝代編著, 裴岩奈々・菊池陽子共著 (p.17), ②仲介・媒介 (インターメディエーション)；井上孝代編著, 裴岩奈々・菊池陽子共著 (p.18)
- 7 d ①文化相関主義：諸文化の間に価値的な優劣はないという点を強調し, 個別対象への価値関与やその理解の努力に消極的ないわゆる「文化相対主義」的立場ではなく, 文化現象をその背景にある歴史社会的・自然環境的諸条件, 国際関係情勢や当該社会の変動などとの相関関係から理解する営為；宮島喬 (p.160)；関口知子 (p.46), ②日系性；関口知子 (p.195), ③日系度；関口知子 (p.218)
- 10 d ①制度化された調整 (institutionalized adjustment)：「共生的多元主義」の場合, 各集団はそれぞれ文化的に相互に異なるが, 構造的には似たような制度をつくって, 他の集団との間に相互接触と交流の関係が維持できるような相互関係のシステム；江淵一公 (1994, p.72), ②テーマ・コミュニティ：「インターネット上に自発的に形成されているバーチャルな関係性であったり, ボランティア・グループとか, 近年, その社会的な役割が注目されるようになった NPO」・「自発性に基づいて形成され, 境界線が柔軟で, かつ自由に出入りする新しいタイプの組織体；金子郁容他 (pp.151-161)；佐藤郡衛 (2003, pp.212-215), ③異化主義：↔同化主義；江淵一公 (1994, p.359)
- 11 d ①ジャーナル・アプローチ：ジャーナル (journal) には新聞, 雑誌という意味以外に, 日記, 航海日誌という意味もあるが, ここでいうジャーナルは, むしろ後者に近いものを意味している；倉地暁美 (1991, pp.70-71, p.79), ②参加型アクション・リサーチ；倉地暁美 (2002, p.51)
- 12 d ①在日マイノリティ；関口知子 (p.243)
- e ①文化変容 (acculturation)；江淵一公 (1994, p.71, p.83), ②選択的文化変容 (selective acculturation)；江淵一公 (1994, p.114), ③“創造的”文化生産過程 (“creative” culture-producing process)；江淵一公 (1994, p.70)
- 2 e ①稼働中の自己 (working self-concept)；関口知子 (p.209)
- 8 e ①オプション思考：未知のものを既知に変える予測力, 常識という枠組みに縛られずに, 「ない」を「ある」に変える柔軟な発想力；裴岩ナオミ (1991, pp.14-47)；佐藤郡衛 (2003, p.171)
- 11 e ①構成主義；久保田賢一 (pp.17-19)
- 1 f ①奪文化化 (deculturalization)：ある集団から文化を奪い, かれらになじみのない新たな文化を強要すること；太田晴雄 (p.223)；関口知子 (p.81)
- 2 f ①根無し草 (the uprooted)；江淵一公 (1994, p.77)
- 7 f ①文化本質主義：各々の文化は, その文化を表わす純正な要素をもっており, 他

の文化との間に何らかの明確な境界をもっている、と捉える文化観；馬淵仁（p. 55）

- 12 f ①境界人（marginal man）：2つの社会，そして単に異なるというだけでなく，敵対的ですらあるような2つの文化に生きるという運命を余儀なくされた人間；江淵一公（1994, p. 76）

〈参照文献〉

- 天野正治「ドイツの学校における異文化間教育」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第12号，1998
- 新井郁男「異文化間リテラシー育成のための教育課題」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第11号，1997
- 石川准『アイデンティティゲーム—存在証明の社会学』新評論，1992
- 石川准『人はなぜ認められたいのか』旬報社，1999
- 伊藤克敏「早期外国語教育導入の文化心理的背景」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第14号，2000
- 井上孝代「『マクロ・カウンセリング』の考え方とカウンセラーの役割」『明治学院論叢649 心理学紀要』第10号，明治学院大学，2000
- 井上孝代『留学生の異文化間心理学—文化受容と援助の視点から』玉川大学出版部，2001
- 井上孝代編著，裴岩奈々・菊池陽子共著『共感性を育てるカウンセリング—援助的人間関係の基礎』（マクロ・カウンセリング実践シリーズ1）川島書店，2004
- 井上孝代「これからの社会に求められる異文化間カウンセリング—『マクロ・カウンセリング』の視点から」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第20号，2004
- 今田高俊『自己組織性—社会理論の復活』創文社，1995
- 今福龍太『クレオール主義』青土社，1994
- 岩田祐子「英語教育におけるコミュニケーション摩擦—大学の英語教育と異文化トレーニングの方法」異文化間教育学会編『異文化間教育』第6号，1992
- 上原麻子「異文化間コミュニケーション研究の現状と課題」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第10号，1996
- 奥住忠久「シンポジウム グローバル教育と多文化教育のインターフェイス」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第16号，2002
- 馬越徹「異文化接触と留学生教育」異文化間教育学会編『異文化間教育』第5号，1991
- 江淵一公「在日留学生と異文化間教育—研究の視点と課題」異文化間教育学会編『異文化間教育』第5号，1991
- 江淵一公「異文化間教育と多文化教育」異文化間教育学会編『異文化間教育』第7号，1993
- 江淵一公『異文化間教育学序説—移民・在留民の比較教育民俗誌的分析』九州大学出版会，1994
- 江淵一公「異文化間教育学会創立20周年記念シンポジウム 多文化共生型まちづくりの変遷」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第15号，2001

- 太田晴雄『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院, 2000
- 大橋敏子「留学オリエンテーションの課題」異文化間教育学会編『異文化間教育』第5号, 1991
- 大村英昭「臨床社会学とは何か」大村英昭他編『臨床社会学のすすめ』有斐閣, 2000
- 小澤理恵子「異文化間トランスの〈耐性〉と〈寛容さ〉について」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第15号, アカデミア出版会, 2001
- 角田 豊「共感経験尺度改訂版 (EESR) の作成と共感性の類型化の試み」『教育心理学研究』第42巻第2号, 1994
- 門脇厚司・宮台真司編『「異界」に生きる少年少女』東洋館出版社, 1995
- 金子郁容他『コミュニティ・スクール構想』岩波書店, 2000
- 神村栄一「異文化間カウンセリング」中島義明編『心理学事典』有斐閣, 1999
- 川上郁雄「転換期の日本語教育」『宮城教育大学紀要』第35巻, 2000
- 川崎誠司「異文化間トランスの育成に果たす Equity Pedagogy の意義」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第15号, 2001
- 久木田純「概説 エンパワーメントとは何か」久木田純・渡辺文夫編『現代のエスプリ 376 エンパワーメント—人間尊重社会の新しいパラダイム』至文堂, 1998
- 工藤和宏「友人ネットワークの機能モデル再考—在豪日本人留学生の事例研究から」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第18号, 2003
- 久保田賢一「総合的な学習」における異文化間教育—学びのパラダイム転換」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第17号, 2003
- 倉地暁美「初級日本語学習者の異文化理解教育を目指して—グループ・リサーチ・プロジェクトの実践研究」『日本語教育国際シンポジウム報告書』南山大学, 1990
- 倉地暁美「異文化間コミュニケーション能力開発のために—ジャーナル・アプローチの創出とその意味」異文化間教育学会編『異文化間教育』第5号, 1991
- 倉地暁美「異文化間トランス獲得・向上に至る過程とその転機」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第16号, 2002
- 小島勝「海外・帰国子女教育班 I 1975 (昭和60) 年以前の研究成果をもとに」吉谷武志 (研究代表者)『異文化間教育の体系化に関する基礎的研究 最終報告書』(平成8~10年度科学研究費補助金基盤研究A(1)研究成果報告書), 1999
- 小島勝「異文化間教育学の構想」龍谷大学教育学会紀要編集委員会編『龍谷大学教育学会紀要』創刊号, 2002
- 小島勝「異文化間教育学の研究枠組みとキーワード—体系化への試論」『龍谷大学論集』第464号, 2004
- コーエン, ロビン (駒井洋監訳, 角谷多佳子訳)『グローバル・ディアスポラ』明石書店, 2001
- 佐藤郡衛「海外における教育摩擦とその反応」異文化間教育学会編『異文化間教育』第6号, 1992
- 佐藤郡衛『改訂新版 国際化と教育—異文化間教育学の視点から』放送大学教育振興会, 2003
- 渋谷真樹「『帰国子女』という呼称をめぐる位置取りの政治—帰国子女教育の可能性を

- 考える」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第14号, 2000
- 白土悟「異文化間教育としての留学生アドバイジング」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第13号, 1999
- 白土悟「異文化間カウンセリングの今日的課題」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第20号, 2004
- 末藤美津子『アメリカのバイリンガル教育—新しい社会の構築をめざして』東信堂, 2002
- 鈴木一代「『国際児』の文化的アイデンティティ形成—インドネシアの日系国際児の事例を中心に」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第19号, 2004
- 鈴木正幸・斉田好男・吉良武志「音楽における異文化接触とバイミュージカリズムの成立—音楽文化の比較からとらえる」異文化間教育学会編『異文化間教育』第6号, 1992
- 関口知子『在日日系ブラジル人の子どもたち』明石書店, 2003
- 関根政美『多文化主義社会の到来』朝日選書, 2000
- 田中共子「異文化適応スキル」江淵一公編『異文化間教育研究入門』玉川大学出版部, 1997
- 塚本美恵子「異文化間教育から見た小学校の英語教育への提言—実践校の成果と課題をふまえて」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第14号, 2000
- 坪井健「留学生と日本人学生の交流教育」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第13号, 1999
- 徳井厚子『多文化共生のコミュニケーション—日本語教育の現場から』アルク, 2002
- 徳井厚子「シンポジウム 異文化間能力の育成を考える—多文化共生社会に向けて」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第20号, 2004
- 塘利枝子『子どもの異文化受容—異文化共生を育むための態度形成』ナカニシヤ出版, 1999
- チェンバース, ロバート『参加型開発と国際協力』明石書店, 2000
- 中島祥子・板倉ひろこ「日本語学習者と母語話者の異文化理解の形成—電子メールプロジェクトワークを通して」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第17号, 2003
- 中西晃「異文化理解と海外子女教育・帰国子女教育」異文化間教育学会編『異文化間教育』第2号, 1988
- 中西晃「子どもの異文化接触と教育の諸問題」異文化間教育学会編『異文化間教育』第6号, 1992
- 中山亜紀子「大学コミュニティにおける異文化間トランス—韓国人研究留学生の3事例から考える」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第16号, 2002
- 西田ひろ子編著『異文化間コミュニケーション入門』創元社, 2000
- 額賀美紗子「アメリカの多文化教育における教師のストラテジー—『英語を母語としない児童』を対象にして」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』

第17号, 2003

野入直美「沖縄のアメラジアン」山本雅代編著『日本のバイリンガル教育』明石書店, 2000

ネウストプニー, J.V.『外国人とのコミュニケーション』岩波新書, 1982

原裕視「異文化間トランス」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第15号, 2001

福岡安則『在日韓国・朝鮮人』中公新書, 1993

ベーカー, コリン(岡秀夫訳編)『バイリンガル教育と第二言語習得』大修館書店, 1996

星野命「異文化間教育とコミュニケーション」異文化間教育学会編『異文化間教育』第3号, 1989

星野命『異文化間教育学会 第24回大会プレセミナー「異文化間教育における質的方法」参考論文集』2003

巖岩ナオミ「メタ的な生き方のすすめ」『教育と医学』第34巻第10号, 1986

巖岩ナオミ『『海外成長日本人』の適応における内部葛藤』異文化間教育学会編『異文化間教育』第1号, アカデミア出版会, 1987

巖岩ナオミ『壁が、透けてゆく』筑摩書房, 1991

本田和子『変貌する子ども世界一子どもパワーの光と影』中公新書, 1999

ホール, S.(小笠原博毅訳)「文化的アイデンティティとディアスポラ」『現代思想』第26巻第4号, 青土社, 1998

松田陽子「海外における日本語教育—異文化間コミュニケーション能力の観点から」異文化間教育学会編『異文化間教育』第4号, 1990

馬淵仁『「異文化理解」のディスコース—文化本質主義の落とし穴』京都大学学術出版会, 2002

水田園子「日本人学生を対象とした異文化コミュニケーション力育成の一アプローチ—クロスカルチャートレーニングの英語教育への適用」Speech Communication Education, Vol.3, 1990

箕浦康子Life in-Between, UCLA Ph.D. Dissertation, UCLA, Dept. of Anthropology, 1980

箕浦康子『子供の異文化体験—人格形成過程の心理人類学的研究』思索社, 1984

箕浦康子「日本帰国後の海外体験の心理的再編成過程」『社会心理学研究』第3巻第2号, 日本社会心理学会, 1988

箕浦康子「異文化接触の下でのアイデンティティ」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第9号, アカデミア出版会, 1995

箕浦康子『地球市民を育てる教育』岩波書店, 1997

箕浦康子「異文化間教育の実践的展開—理論化にむけて」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第12号, 1998

宮島喬『文化と不平等—社会学的アプローチ』有斐閣, 1999

村田雅之「インターフェースとしてのチューター」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第13号, 1999

- 森幸一「還流型移住としての〈デカセギ〉—ブラジルからの日系人デカセギの15年」法政大学比較経済研究所国際シンポジウム『国際労働力移動のグローバル化と外国人定住—ネットワーク形成と政策課題』1999
- 森本豊富「越境者と異文化間教育」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第19号, 2004
- 安場淳「異文化間サポート・ネットワークの形成—中国帰国者の二世青年の場合」異文化間教育学会編『異文化間教育』第6号, 1992
- 山岸みどり・井下理・渡辺文夫「『異文化間能力』測定の試み」『現代のエスプリ』第299号, 至文堂, 1992
- 山岸みどり「異文化間能力とその育成」渡辺文夫編『異文化接触の心理学—その現状と理論』川島書店, 1995
- 山岸みどり「異文化間リテラシーと異文化間能力」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第11号, 1997
- 山田礼子「駐在員家族の教育観の変容—トランスナショナルリズムとグローバル化の進展のなかで」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第19号, 2004
- 山本雅代『バイリンガル—その実像と問題点』大修館書店, 1991
- 横田雅弘「留学生支援システムの最前線」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第13号, 1999
- 横田雅弘・白土悟『留学生アドバイザー—学習・生活・心理をいかに支援するか』ナカニシヤ出版, 2004
- 横林宙世「留学生のアカルチュレーションと異文化間トランス—転機とその後の展開」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』第16号, 2002
- 吉野耕作『文化ナショナルリズムの社会学—現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会, 1997
- ロウ, リサ(浜邦彦訳)「アジア系アメリカ—異質性・雑種性・複数性」『思想』第859号, 1996

註

- (1) 小島勝「異文化間教育学の研究枠組みとキーワード—体系化への試論」『龍谷大学論集』第464号, 龍谷学会, 2004(平成16)年, p.47。
- (2) (1)「全体班」では, 研究分担者として, 佐藤郡衛・東京学芸大学国際教育センター教授には「異文化間教育学の固有性」, 吉谷武志・九州大学大学院人間環境学研究院教授には「主としてヨーロッパにおける異文化間教育学の研究動向」, 塚本美恵子・駿河台大学文化情報学部教授には「日本の異文化教育の現状と情報メディア」, また研究協力者として, 村田雅之・東京工芸大学助教授には「情報教育学と異文化間教育学」, 出羽孝行・龍谷大学非常勤講師には「在日韓国・朝鮮人教育の研究動向」, 松浦真理・華頂短期大学講師には「日本の異文化間教育の授業の実際」をお願いしている。(2)「留学生班」では, 研究分担者である, 横田雅弘・一橋大学留学生センター教授には「異文化間教育学とカウンセリング」, 白土悟・九州大学留学生センター助教授には「異文化間教育学とアドバイザー」, (3)「言語とコミュニケーション班」では, 研究分担者の山本雅代・関西学院大学商学部教授には「異言語間教育」, 徳井厚

子・信州大学教育学部助教授には「日本語・コミュニケーション」、足立祐子・新潟大学国際センター助教授には「日本語教育」、研究協力者の末藤美津子・明治学院大学非常勤講師には「バイリンガル教育」、井狩幸男・大阪市立大学大学院助教授には「英語教育」、加藤三保子・豊橋技術科学大学助教授には「手話教育」についてお願いし、(4)「発達とアイデンティティ班」では、研究分担者の塘利枝子・同志社女子大学現代社会学部教授には「発達と異文化受容」、鈴木一代・埼玉学園大学人間学部教授には「アイデンティティの形成過程」、研究協力者の小澤理恵子・山梨大学非常勤講師には「青年期に関する研究」、廿日出里美・安田女子短期大学保育科助教授には「乳・幼児期に関する研究」をご担当いただいている。そして、(5)「文化班」では、研究分担者の馬淵仁・大阪女学院大学国際英語学部教授には「異文化間教育学の文化観」、松尾知明・国立教育政策研究所初等中等教育部主任研究官には「異文化間教育学と多文化教育」、渋谷真樹・奈良教育大学教育学部助教授には「カルチュラル・スタデーズの示唆性」、研究協力者の西尾亜紀子・武庫川女子大学非常勤講師には「ジェンダーの視角」について研究していただいている。

(3) 佐藤郡衛『改訂新版 国際化と教育—異文化間教育学の視点から』放送大学教育振興会、2003（平成15）年，p.46。

(4) 1. 適応，2. アイデンティティ，3. 言語，4. リテラシー，5. コミュニケーション，6. 発達・成長，7. カウンセンリング，8. 文化，9. 資質・能力（理解など），10. 人間観を，表のように修正した。ただ，これも現段階での修正であり，今後関連文献をさらに調べることで，検討をつづけていきたい。

キーワード 異文化間教育学 横断的研究 パラダイム